日清戰爭繪卷第三
成歡之巻

日清戦争繪巻巻第三　成歡之巻

其一　龍山幕営

龍山暁碧人聴
清笳淡靄の鎖し
ところ青嵐の封す
るふところ満山の草
木皆兵かと訝る

其二　公使飛檄

汗馬雪を嚙み星馳して京城公使館より水源府乃軍に入る急使齎す所の檄ハ何ぞ是れ韓王が大鳥公使に牙山の清兵攘斥を囑するの書

其三　振威雷雨

驛の名何ぞ徒らならん將軍鞭を揚げば我軍當に大に牙山に捷つべしと黑風白雨の中赤電狼藉して路を照し兵氣慘として驕しく

其四　糧食徴發

韓人魯愚多く家を提げて遁れ我軍次に糧食の徴発に苦ミ将軍黍を食ふに至る

其五　將校偵察

素沙場の丘上遥に成歡の敵壘を望む紅旗紫旗紛として雲乃如し

其六　安城夜渡

夜老て月黒し安城の渡把橋半バ断えて水高さと数尺一軍渡渉して直ちに敵壘に迫る蘆荻風に鳴り淅々として軍聲を乱さと

其七 白衣諜者

綺春村端寸前漆の如し白衣の韓人ゟ路を問へで渠高踊して遁逃を定めて敵の諜者

其八 松崎大尉戦亡

飛丸急霰の如し松崎大尉終に戦殁し征清軍中第一殉國の鬼となる

其九　成歡戦

砲火ハ急雷銃丸ち狼雨軍旗の指す所我兵猛前して突貫し吶喊天地を震ふ敵壘崩裂、胡虜震駭屍ハ山の如く血ハ川の如し

其十　勇哉喇叭卒

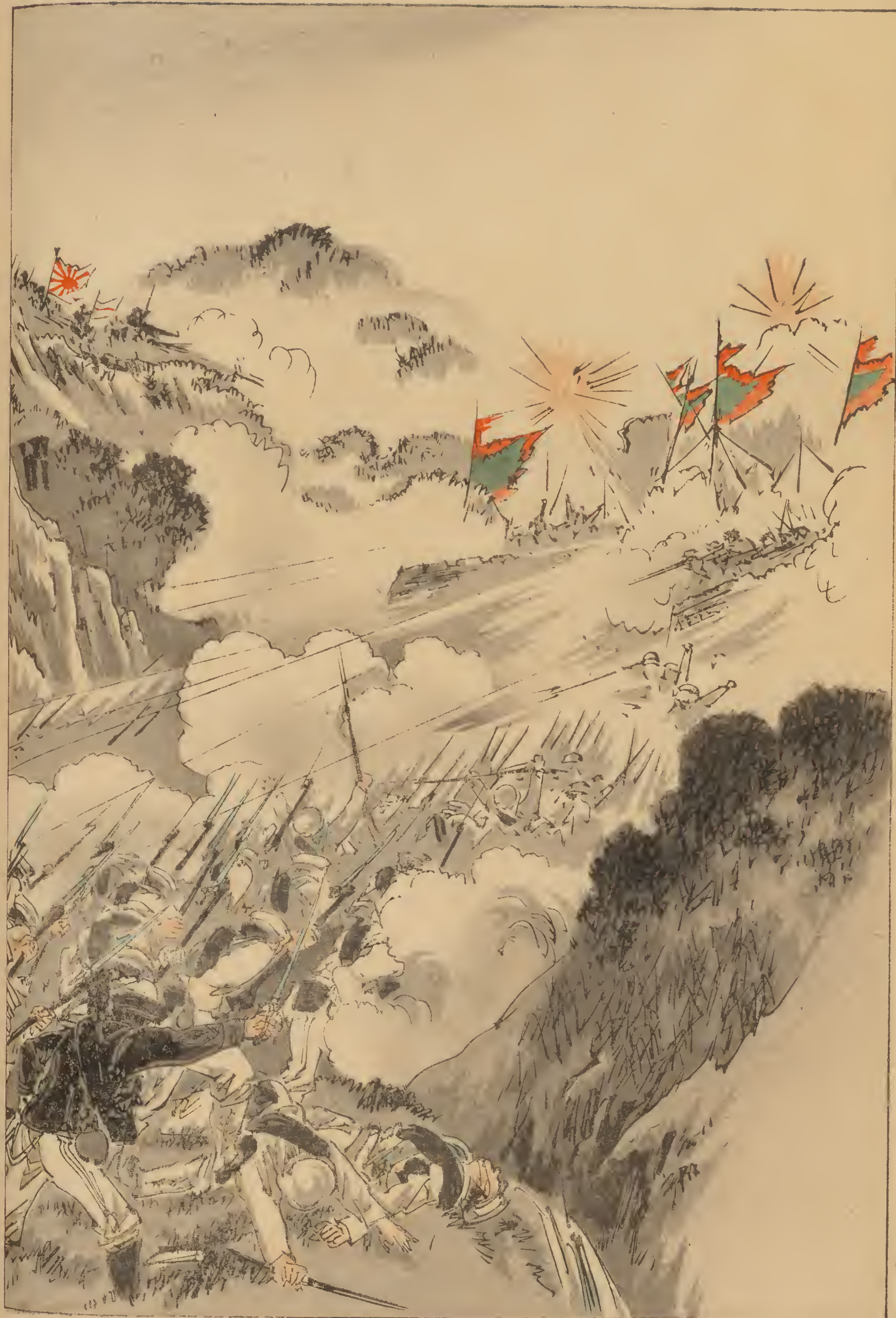
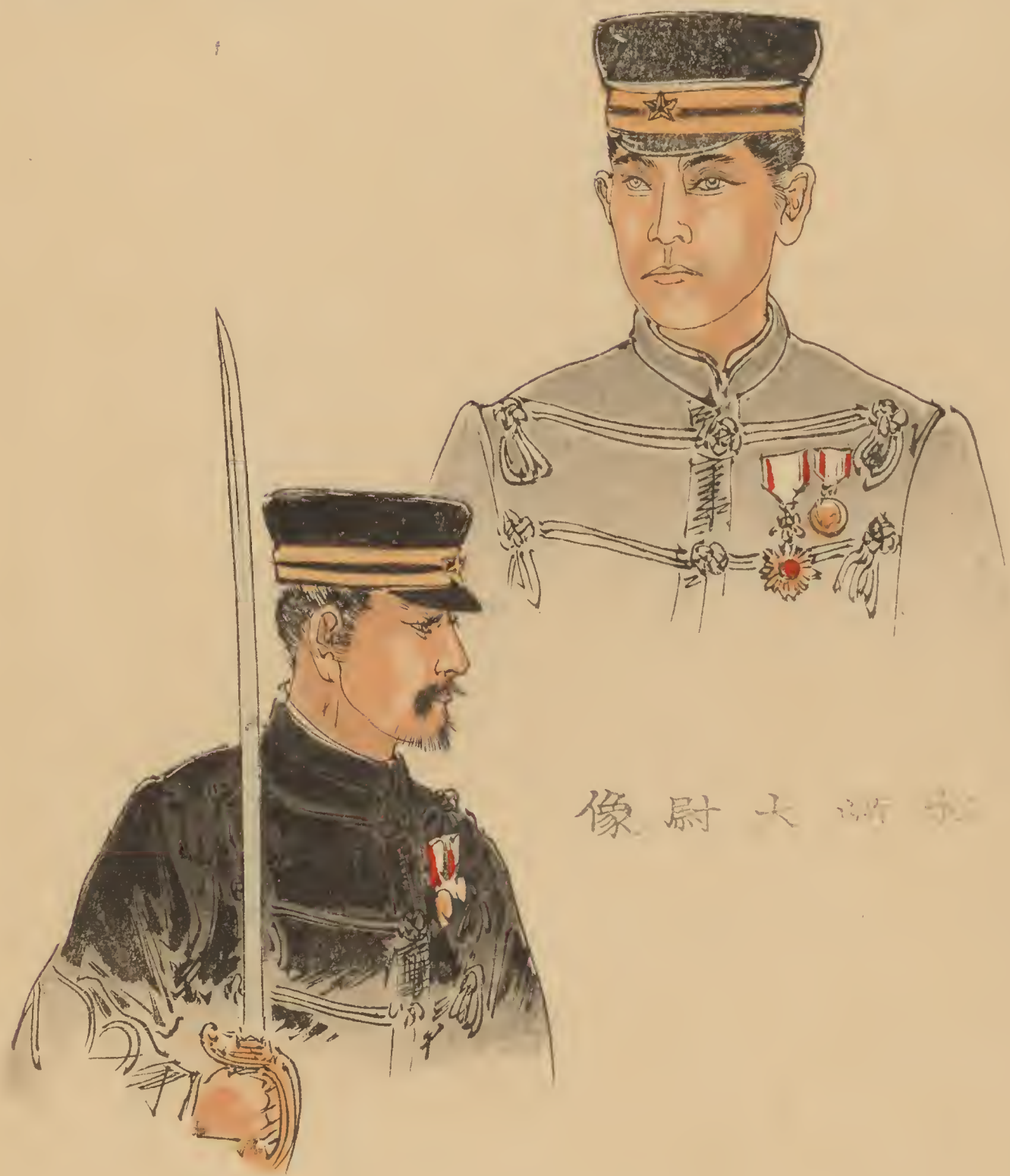
弾丸その胸を洞しも尚ほ喇叭を口にし満腔の氣息こもらんとするまで進軍譜を吹て止まざりき勇なる哉

白神某

其十一　松崎時山両将校

一ハ眉目俊秀一ハ容貌雄偉、共に安城渡畔の綺春村に戦ひし勇士

松崎大尉像

時山中尉像

日清戰爭畫巻 成歡の巻

七月二十三日の曉、京城にて端りなくも我軍隊と閔黨の韓兵との小戰ありしより、大鳥公使は韓廷の改革をば一刻も猶豫しがたしとなし、國王及び大院君に百政革新の方略を授けたりしかば、事大黨は閔泳駿の逃亡と共にさながら朝露の消るか如くその勢を失なひ、大日本帝國の厚義に感じて、開化黨勢を得大院君は雲峴宮より起ちて親しく事を視、俊才を集めて軍國機務所なるものを王城内に新設して、百般の政その緒に就き、大に人心を新たにすべき大革新は始まらんとせり、

越て二日、乃ち七月二十五日、韓廷は忠清道の牙山に屯在せる清兵

を撃ち攘ふとは、我國の兵力にては覺束なければ、何卒貴國の軍隊にて善しなに處分し給はれと依頼し來れり、大鳥公使は直ちにこの由を龍山なる混成旅團長大島少將に移牒しければ、一軍の士氣俄かに奮ひ起ちて意氣斗牛を衝んばかりなり、この混成旅團の

幕營せる龍山（其一圖參照）

といへるは、漢江の上流揚華津及び三湖の邊に在りて、南は江に枕み、北は銅雀洞を隔て直ちに京城の崇禮門（南大門）に通じ、その間一里にして近く、松樹晩翠を凝して、青、雨ふらんとし、林高く氣澄み、朝霞暮靄、近帆、遠山、その眺め頗ぶる佳絶、盛暑の中、軍隊を幕營せしむるに尤も佳なる土地なり、兵站部は江に枕めるところに在りて、百貨日々仁川より遡のぼり來たれる滊船に載せられて、山のごとく岸邊に積まれ、日本高麗うち交りたる人夫數百人罵しり呼びて、右往左往に奔走せる有様は盛なりとも亦た盛なり

二十五日の拂曉、大島少將は混成旅團を率ゐ、龍山を發して直ちに牙山に向ひたり、長岡少佐參謀となり、福島中佐も亦た帷幕に參し、軍氣旺盛、先づ數十の韓船を徵發して漢江の銅雀津の渡口を渡り、烈日の下を冒して山には樹稀に野には草少なき中を行軍し、流汗は體に浹ねくして白色の兵衣は黄み浸みて沙埃これに塗れ、渇すれども水を得に難く、黄ばみ濁れる田の水を掬ひ飲み、又は草の間にチヨロ／＼流るゝ蛇より細き清水を爭そひて、僅かに喉を沾

ほしつゝ、やがて夕陽あかく〱と遥の村の粉壁を染め、鵲の群れ飛びて塒を急ぐ黄昏時に、果川の驛に着きたりけり、

果川といへる驛は、人家僅かに二三十軒、川あり村の端を流れてその邊に林あり、林の外は青草軟かく晩風にうち靡きて、今宵の露營には恰好の地なりとトして、一軍こゝに露營をなしぬ、此の夜は月の升ると遅くして滿天の星影、微ろに青く草葉の露を照して、五千の貔貅の夢を白ます、やがてほがら〱と夜は明たれば一軍再び結束して、朝風に聯隊旗を吹き靡かへし、堂々として果川を發して水原府に向ひたり、昨日に増したる今日の熱さ、遅々關、南大嶺の嶮を踰て進み行けば、沿道の韓人等は戸ごとに水を盛りたる壺を軒蔭に置き、瓢簞を半ばより切りて作るカパチといへる碗を浮べて兵士に供するさま、誠とに簞食壺漿して王の師を迎ふるといふは是れなるべし、やかて水原府に着しければ、旅團長は府廳に入りてこゝに舍營し、軍隊の多くは城の背の松林のうちに露營地を相して、一夜の計ごとをなし、又昨日よりの塵垢を洗はんとて、府の中央を流るゝ川に入りて身を洗ひ襯衣を濯ぎたり、其夜、

急使大鳥公使より來り（第十二圖參照）

て、牙山の清兵擁斥に關する韓廷よりの公文、及ひ兵糧人夫の徵發に就きその關文を、大島少將の許に送り來たりたれば、軍氣再び奮ひけり、府の判官は鷄及ひ卵を我軍に贈りて軍旅の情を勞ひ且つ

人馬兵食の徴發に盡力しければ旅團長は將校を彼の家に遣り、金二十五圓を贈りて其の懇情を謝し、且つ我が帝國は義の爲めに韓を助けて淸を征することを告げゝれば、府の役人は皆な感動せり明れば二十七日、その日の午前第四時に全軍水原府を發して振威に向ひたり、此の日は昨日に比すれば、炎熱いよ〱甚だしく、飲料水に乏しき爲め、士卒の渇を病みて昏暈を發し、路傍の草中に倒れ伏し、後より來る衞生隊を俟つもの多かりしが、十一時と覺しき頃、峯のことき黑雲天の一方より露はれ來しが、やがて迅雷一過して

黑風白雨

（其三圖參照）

野に滿ち山に充ち、爲めに炎暑を洗ひ去りて、全軍こゝに蘇生の思をなし、勇みに勇みて進みたり、兵士等は皆な喜こびていひけるは、振威とは此上なき佳き名にはあらずや、この雷のごと、この雨のごと、又はこの風のごと、一氣に牙山に走せ向ひて、胡虜を殲しにし、我が帝國軍隊の威光を振ひ輝やかさんこと、勇まぬものこそなかりけれ、やかて振威縣に着しければ、直ちに縣廳に入りてそこを旅團本部となし、縣の俠客某なるもの潛かに敵に通じて、我軍の進來を告げん爲め、朝より三たび使を淸軍に送りたることを探知し、直ちに之を縛して縣廳の門の柱に繫ぎ、嚴しく之を糺問せり、此夜我が斥候騎兵は七原に於て敵騎と相衝突せしが、急に擊ちて之を退けた

り

三十分の拂曉、全軍はいよ〳〵七原に向つて進發せり、既に敵地に入りたるをもて、戰鬪準備をなし、咄嗟といふ間に打ち放さんと皆な肅然として進みしが、七原に入るに及びて敵の隻影なし、忽ち我が斥候騎兵は馳せ返りて報ずらく、こゝを距ること大約二里、成歡の驛に堡壘を築き、盛んに軍旗を建て連ねて、數千の清兵その邊に簇がるを見ると、是に於て將軍は先づ一隊を稷山より天安の逃路を扼さしめ、終に軍を進めて成歡を距ること一里半なる素沙場に進めたり、此邊は一面の水田にして少丘處々に起伏するの外、少も眼界を遮ぎる者なし、是に於て一軍は丘勢起伏の姿に依りてその陰の青草の上に露營し、眼前二里にも足ぬところに優勢なる敵を置きながら、長途の疲勞を休め、明曉健鬪の勇氣を養ひ、優かに靜まりて半日をこゝに暮したるこそ大膽なれ、軍のコノ地に着するや將校數名は先づ髙丘のうへに攀ぢ上りて、遙かに敵壘を望見し、作戰の方略を講じたり

成歡敵軍の光景（其五圖參照）

素沙場より見たる敵軍の光景は、我軍を距ること直徑一里半許の髙丘、松林の相連なるのところ、隱々として雲のごときものを見たり、望遠鏡を把りて仔細にこれを視れば、林の盡るところの髙丘のうへに、白色の帳幕都べて四五十個あり、白幕のうち、更に一個の青幕

あり、細視すれば二個となり三個となり、又た合して一個となる、四面は土を盛り　壘堡を作たるのゝ如く、新たに掘り上げられたる土の色赤赫にして、上に雜木を折りて來りて之を掩ひしものゝ如く、一帶の綠色をなし、堡の廣袤方二町ばかりなるを想像し得たり

更に仔細に眸を凝せば、堡を距ヿ數町ばかりのところに、別に一堡壘ありて、中に帳幕のごときもの都べて二三十あり、他は分明ならず

更に高丘四五相依るところを凝視すれば、雲よりも淡く、煙よりも濃き一色ありて靜定するものあるを覺ゆ、而も雲なるか烟なるか、或は亦た敵の幕營なるか、堡なるかを確視するヿ能はず、

最初の堡壘の中央には、一旗の高く半空に飜がへるを見る、旗の色、紅、日に映じて耀やく、蓋し敵の牙旗ならん、牙旗の周圍には分明に數へ盡すヿ能はざれども六七旒の紅旗白旗の簇がり立るを見る、而うして其の一個若くは二個の青幕は、蓋し大將の幕營ならん、第二に發見したる堡壘のうちにも、亦た大旗の高く飜がへるを見る、大旗を環りて更に數旒の小旗あるを見る、

その他は、青丘青蕪、青田と相映帶して、一望唯々蒼々然たるを見るのみ、我軍は實に敵を距るヿ一里半のところに逼れるなり、

やがて二十八日の夜と二十九日の曉の堺なる午夜に至り、一聲の鐵笛は一軍に鳴り渡りて、五千の兵士は躍然として銃を執て起て

り大島少將は軍を分ちて二となし、一隊は武田中佐之を率ゐて本道より前進し、一隊は大島少將自から之を率ゐて安城渡邊より敵の右翼に向ふ、前日の降雨にて水は田より溢れて泥濘靴を沒し、且つ土質の粘性を帶るを以て歩武に力なく、宛も脂肪の上を行くが如し、斯て

安城渡（其六圖參照）

に至るや、橋は半ばより斷て渡るべからず、勇壯なる我兵は流を亂して徒渉し、水は乳邊に及ぶも猛前して彼岸に上り、直ちに敵壘に迫らんとす、路黑くして迷はんとす、偶々白衣の人ありて來たる、天昏きを以て其の韓人なるか若しくは淸兵なるかは明らかに之を視ると能はざりしが、武田中佐は通辯人を呼びて之に路を問はしむ、通辯人走り行きて之に路を問はんとすれば

白衣の人は忽ち踵を回して逃ぐ（其七圖參照）

逃げながら大に號叫せり、已れ無禮ものめと中佐は馬上より大喝せしが、忽ち見る、彼方のキチン村より閃然たる一星火迸しり出ると見るや、飛丸飛びて一隊の頭上を掠めたり、スハ敵かと言ふ間もなく、簇々として村端より露はれ出なる敵兵數百人、不規律なる亂射をなしつゝ襲擊せり、丸の集まると急霰の如し、此時松崎大尉は前衛となり、山田少尉は尖兵となり、田邊大尉は隊の先頭に在りしが、この襲擊に逢ふや否や松崎山田の兩尉官は急に部下を率ゐて

水田に入り、其の畔路を楯となして拒き戰ひたり、敵は激しく發射して雨の如く彈丸を下しぬ、偶ま一丸あり、飛び來たりて畔を貫ぬき餘力山田少尉の左脚を穿てり、少尉は兵氣の沮喪せんことを恐れ、靜かに繃帶を施して將に起んとせし時、彼方に當りて

『やられた』と叫へるものあり（其八圖參照）

驚きて之を視れば、松崎大尉は劍の欛を握りつめたる儘地に倒れたるなり、走せ行きて之に就けば、大尉は頗る督戰し居たるうち、一丸その肩を貫き、更に肺を穿ち終に無念の切齒をなして、名譽なる殉國の義を果して逝けるなり

武田中佐はこの襲撃を見るや急に各中隊に命じて展開せしめたり、展開の際、時山中尉の一少隊は、不幸にして大澤の後方に展開したるを以て忽ち懸崖の上より落ち、深水の中に入れり、水底泥深くして脚を拔くこと能はず、水は肩を踰て帽子の廂に達し、終に頭を沒するに至れり、然れども勇猛なる兵士は身を鴻毛の輕きに比して死を顧みず、水中より渉りしが爲め、溺死するもの二十九名、時山大尉も亦た殉國の鬼となれり、我軍既に展開を終り、乃ち猛然として進擊す、敵兵潰走、我軍勢に乘して突貫す、敵兵靡披、多くは銃劍に貫ぬかれて斃死し肝腦地に塗る、この戰ひに於て敵の死するもの數十人、

大嶋少將率ゐる一隊は右翼隊の戰鬪を顧みることなく鳴を靜めて直

前し、直ちに敵の右翼の松林に砲兵陣地を布きたり、キチン村の戦終りしより後一銃聲を聞かず、天地寥廓として唯だ晨星の落々たるのみなりしが、五時三十分に至り、本隊は忽ち敵壘に向つて砲撃を初めたり、敵は其の不意に出でたるに驚き、急に應砲すると能すは、唯だ小銃を亂射して之に應じ、暫くしてやがて大砲を連發せり、兩軍砲戰すると一時間、我榴霰彈は常に敵壘の上に炸裂して、その度に堡壘崩碎、黒氣天に沖り、敵兵震駭、是に於て

我軍一齊に銃劒を揮ひて突貫す（其九圖參照）

幾千の劒光は硝烟瀰地の中に燿き渡り、聯隊旗の影は電のごとき劒光と相映じ、突貫の聲は天地を震撼するばかりにて、凄まじなんといふばかりなし、敵の右翼第一壘は既に陷り、續ひて第二第三皆な我が勇猛なる突貫の爲めに崩れ落ちて、終に右翼隊と挾撃し、全たく成歡の敵壘を占領せり、その突貫の際、喇叭卒白神源次郎なるもの

勇ましく進軍譜を吹奏し（其十圖參照）

て軍氣を鼓舞せしが、一丸來たりて其肺を貫ぬく、源次滿腔の氣力盡んとするも猶進軍譜を吹奏し、終に地に倒れしが尚ほ喇叭を口より離さゞりき　是に於て我軍は敵の本壘に入り

高く聯隊旗を擧げて陛下萬歲（其十二圖參照）

陸軍萬歲を唱ふ、一軍の貔貅之に和し呼聲地を動かす、會ま旭日杲

々そして東山の上に出で、この胡虜の血をもつて彩られたる大野を照す、氣象雄大、軍勢いよく振ふ、この役、敵死するもの三百、傷者五百、大砲八門及ひ旌旗軍器を山のことく戰利せり、我兵の死傷將校六名、下士卒八十二名なりき、是に於て我軍の一部は即日長驅して牙山に入り、直ちに敵の本據を奪へり、途中大雷雨、山谷を跋渉して殘敵を射殺し、本隊は其夕腰盬に宿し、翌日牙山に入り、米六七百俵、銃砲彈丸數十萬、帳幕數百、及び兵仗を分捕し全く敵の巢窟を覆へせり、敵の殘兵は皆な洪州に走り、更に平壤の軍に投せり、大將葉志超、聶士成は僅かに身を以て免かれぬ

日清戰爭畫卷　成歡の巻終

IX. Battle at Shekwan: Towards the daybreak, Japanese Main Regiment under General Oshima, attacked the Chinese forts, together with the branch regiments at the same time. Chinese General Cheh was soon driven, after a little resistance, backward to the Chinese Headquarters.

X. The Famous Bugler, Shirakami Genjiro. He was a young soldier aged 23 years, and was a bugler belonged to 21st regiment. During he was blowing his horn, he was shot down-through his lung. The voice of his horn drooped down by degrees, and into silence at length. When his commander ordered other bugler to serve the duty, he denied to have the commander done so, and insisting to serve it himself, blew his last breath in his horn.

XI. Late Lieutenant Matsuzaki Nao-omi and Late Sub-Lieutenant Takiyama Kyozo:—The latter during was leading his soldiers through the darkness, the enemy fired their guns suddenly on Japanese Army, who quickly spread themselves on fighting line. At the moment, he has missed his step into the river, falling from steep cliff, and died in his heartily discontent.

XII. Capture of Chinese Camps. —The defeat of frontier alarmed Chinese Marshal Yih, who was sleeping then with Corean girls in his tent, ordered his army to fly to Wongju, instead of resisting his enemy at any rate. Japanese entered the vacant Chinese Headquarters without finding any soldier there, but the banners, flags, food, weapons, maps, and important documents left on ground.

PUBLISHED EVERY MONTH.

Price—, Sen per Volume, Postage—2 Sen per Volume.

SHUN-YO-DO.

THE PUBLISHERY

No. 5, Tori Shichome, Nihonbashi,

Tokyo, Japan.

明治廿八年三月十一日印刷
明治廿八年三月十二日發行

實價一冊二十五錢郵稅二錢
十冊前金二圓卅錢郵稅廿錢

編輯者 鈴木宗太郎
發行者 和田篤太郎
印刷者 西村熊吉
彫刻者 五島德次郎

發行所 東京日本橋區通四町目五番地 春陽堂

THE BATTLES
BETWEEN
JAPAN AND CHINA.

Vol. III = SHEKWAN.

I. Japanese Army consisting of one Mixed Brigade is encamping at Riu Zan near Seoul.

II. Military Messenger hasting to Japanese Head quarters announcing that the Corean King requested Mr. Otori, the Japanese Ambassador to drive the Chinese Army at Asan out of the Kingdom.

III. Japanese Army marching to Asan amid stormy night.

IV. Japanese Army desirous to get food, calling back the Corean people who fled with their family in fear of the war.

V. Japanese officers looking, down the hill near Shekwan, on the Chinese Camp adorned with the numerous flags of various tints.

VI. Japanese wading the River Anjoto :—At the very early morning of the July 29th, 1894, Japanese Army marched to Shekwan across the muddy river of Anjoto which was then flooded with recent rain.

VII. Lieut-Colonel Takeda at the head of Japanese Army, missed the way through the darkness. When he has found a Corean walking at the time, and called him to arrest it and ask the way, he flied away with a cry. It was perhaps a Chinese spy.

VIII. Lieutenant Matsuzaki shot by a flowing bullet. When Japanese Army proceeded towards the Chinese camp, the latter had observed that former was approaching along, and discharged muskets suddenly. The Lieutenant was a victim to one of these shots, as the first Japanese officer who died in the battles between Japan and China.